古文の窓❻　写本の本文―「青々たり」と「草青みたり」

教材のねらい

版本と写本の違いを知り、写本では本文が変化することについて、具体例に即して理解を深める。

「青々たり」と「草青みたり」は、漢語と和語という違いがある。どちらの表現がよいと思うか、生徒自身に考えさせたい。

解説

写本とは、書き写された本のことである。これに対して、印刷された本のことを版本という。

江戸時代には、印刷技術が民間に普及し、多くの本が出版されるようになった。同じ版を使って印刷された本は、当然ながら同じ本文を持っている。

一方、江戸時代には写本も多く流通していた。写本は書き写される過程で本文が変化することも多い。書写の過程で、もとの写本の本文にあった誤字や脱字が訂正されることもあり得る。あるいは逆に、もとの本文を写し間違えることもあり得る。

『おくのほそ道』は、元禄七年に芭蕉が死去した後、元禄十五年に京都の版元井筒屋庄兵衛から出版された。この版本のもとになった本（底本）は、西村本と呼ばれる写本である。この西村本のほかにも、『おくのほそ道』には中尾本・曽良本・柿衞本とよばれる写本がある。

これらの写本について、『おくのほそ道大全』（笠間書院、二〇〇九年）を参考にしてまとめると、次の通りである。

○中尾本…芭蕉自筆の草稿本とされる。書込み・貼紙訂正がある。中尾松泉堂所蔵。

○曽良本…中尾本を書写したとされる。本文には補訂が施されている。天理図書館所蔵。

○西村本…素龍が清書した本。補訂後の曽良本を清書したと考えられる。ただし曽良本と西村本の間には異同がある。西村家所蔵。

○柿衞本…素龍が書写した本。西村本との間には異同がある。柿衞文庫所蔵。

この教材では、中尾本と曽良本の顕著な違いが見られる箇所として、「平泉」の「城春にして…」の箇所を紹介している。ちなみに、教科書の「平泉」の本文が依拠している日本古典文学大系の本文は、西村本を底本としている。

この三つの写本の当該箇所を、あらためて併記してみよう。

○中尾本「城春にして青々たり」

○曽良本「城春にして青みたり」。ただし「青」の上に「草」を補う。

○西村本「城春にして草青みたり」

教材の図版を参照してほしい。「中尾本」の図版の二行目に「青々たり」という表記がみえる。「曽良本」は図版の二行目に「青みたり」とあり、「青」の上に朱筆で「草」と書かれている。西村本の本文は、このように補訂された後の曽良本の本文を写し

ていると考えられる。

「城春にして…」という表現は、一〇三頁の脚注12にある通り、杜甫「春望」にある「城春ニシテ草木深シ」をふまえたものである。「青々たり」「草青みたり」は、この「草木深シ」を言い換えた表現である。

中尾本は芭蕉自筆本とされる。西村本は芭蕉が携行した本である。表現の改変を推敲の軌跡ととらえれば、芭蕉は当初「青々たり」という表現がよいと考えていたが、最終的にはこれを「草青みたり」にあらためた、と考えることもできる。しかし、この改変については諸説があり、芭蕉はもともと「青みたり」とするつもりであったとする説もある。

ところで「青々たり」と「草青みたり」は何がどう異なるのであろうか。「青々たり」は、あおあおとしている様子を言う。文脈に即して言えば、春になって草があおあおとしている、ということである。「草青みたり」の「青む」も、草などがあおく茂る意である。

要するにどちらの表現であっても、春になって草があおあおと茂っている様子を表していることに変わりはない。二つの表現の違いは、その情景を漢語の「青々」と和語の「青む」のどちらで表すか、という点にある。

漢詩の一節を言い換えるにあたって、漢語を選ぶか、和語を選ぶか。自分ならば「青々たり」と「草青みたり」のどちらを選ぶか。生徒自身に考えさせたい。

参考

中尾本・曽良本・西村本・柿衞本の説明は、楠本六男・深沢眞二編『おくのほそ道大全』（笠間書院、二〇〇九年）所収の藤原マリ子編「『おくのほそ道』諸本対照表―より深く読むために」の「凡例」を参考にした。

「青々たり」「草青みたり」の改変の事情に関する諸説は、同『おくのほそ道大全』の「各章段を読み込むためのガイド」の「三六、高舘覧古」に詳しい。

江戸時代における写本と版本の関係については、塩村耕「近世における写本と版本の関係は」（松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編『古典文学の常識を疑う』勉誠出版、二〇一七年）が参考になる。

（佐藤　至子）